

薬害スモンの被害者らでつくる「県スモンの会」は昨年1月、会長の横領問題が発覚して解散に追い込まれたが、副会長の梶中理文さん(59)ら一部の被害者らが新たな組織「県スモン病患者を支援する会」を結成した。背景には、「スモン病を風化させてはいけない」という強い思いがある。新組織で活動を続ける患者や支援者を追った。

### 「県スモンの会」昨年、横領問題で解散

【阿部亮介】

梶中さんがスモン病を発症したのは高校1年の時。子供のころから患っていた、ネフローゼ症候群で入院した際にキノホルムを服用したのが原因だった。腹部や足に激痛が走り、のたうち回った。1週間ほどで激痛は治まったが、足が動かず、1年半の入院生活を余儀なくされた。

1年の留年を経て高校を卒業。慢性頭痛やめまい、足のしびれに悩まされながら、事務員として働いたが、病状が悪化する仕事を辞めるという悪循環が続いた。「病院に行っても医師にスモンと関係はないと言われたこともあった。医師にも知らない人がいる」と痛感したという。

現在は、健康管理手当て障害年金を合わせて収入は月約10万円。患者に

認定されると医療費は無

料だが、家事などで利用する介護保険の一部は自己負担が重くのしかか

る。県スモンの会は長年、県内の患者の窓口となっ

## 大和路 密着

整腸剤 副作用 スモン病 キノホルムの副作用として発症。中枢神経が侵され、骨折や白内障、高血圧、慢性頭痛、めまい、不眠などの症状が出る。重症になると、寝たきりになる場合もある。1960年代後半に広がり、患者数は72年までに約1万1000人に上った。全国各地で薬害訴訟が起こされ、国や製薬会社の責任が認められた。08年度末時点で、医療受給者証の交付は全国で1804人で、県内は35人。

# 「スモン病 風化させぬ」

## 被害者ら新組織「支援する会」結成



会の運営について話し合う梶中さん(右)と阪口さん

奈良市内で

領したことが発覚。梶中さんらは詐欺容疑で会長を奈良地検に告訴したが、最終的に「証拠の収集が困難」として取り下げ、同会は解散した。

しかし、患者が高齢化し、スモン病に対する認識が薄れる中、梶中さんは危機感を感じていた。「医療や介護関係者に知ってもらい、患者同士で交流することが必要だ」。県市民オンブズマン代表幹事の阪口保さんの助けも借りて、昨年3月に新組織を設立した。

会員25人のうち患者は31名。今年2日に奈良市内で開いた花見では、他の患者や遺族から「スモン病を風化させてはならない。会の存在は必要」という意見が相次いだ。梶中さんは「サポートしてくれる人の手助けでここまでやって来られた。今後、介護保険の無償化などにも取り組みたい」と話す。同会は活動資金のカンパを募っている。問い合わせは阪口さん(090・6965・3153)。